



## 「手の変化」広がる夢 〈企業編〉横引シャッター(3)

★〈企業編〉横引シャッター(3)

2016.02.17

連載: オレンジ世代の「生きがい」探し

ツイート

おすすめ 3

G+1 0



妻が大ファンだった矢沢永吉のグッズ。ファン垂涎の品々

【拡大】



東京都足立区の横引シャッターで綾瀬工場長代理を務めている小林義正さん(65)は、ユニークなキャリアの持ち主だ。映画の製作・撮影や国立演芸場の大道具を担当してきた。現職への就職は、駅構内にある売店のシャッターが不思議な形だな、と思って調べたことがきっかけという。

### ■絵描きからエンジニアへ

1950年、東京生まれ。現在も足立区に住む。都立井草高校卒業後、アテネフランセへ入学した。併設されている文化センターの上映活動を手伝ううちに、製作に携わるようになった。カメラマンやフィルム運搬、映写技師をして、仲間プロダクションを結成した。

31歳で転機が訪れる。肺結核で体を壊した。ちょうど結婚しようとしていたときでもあり、転職を決意する。以前趣味で描いていた版画の腕を生かして、国立演芸場の大道具を担当する金井大道具へ就職した。

国立演芸場の、舞台の奈落の底が仕事場だった。巨大な背景を描くのは、直径5ミリにも満たない細い面相筆だ。この筆を使って歌舞伎や、文楽の背景を仕上げていく。職場には芸大卒などの美術畑のメンバーが多く、仕事の他に個展を開いたりする人も。小林さんは異色の前歴であったが、かえってそれを面白がってくれるような同僚だった。

次の転機は、幼稚園の同級生だった妻が急逝したとき。頭の中が真っ白になり、仕事が手につかなくなった。音楽の趣味は、夫婦共にロックで、妻は矢沢永吉の大ファン。結婚後も“追っかけ”をやり、コンサートにも夫婦で出かけていた。その相方がもういない。

全てをゼロベースに戻したい衝動に駆られた。また、通勤電車も苦痛に。そこで、ユニークな製品の横引シャッターへ飛び込み同然で応募し、先代の社長と意気投合。重さ3グラムの面相筆から重い工具へ持ち替え、新しい職場へ。自分の「絵描きの手」が、みるみるごつい「エンジニアの手」に変わっていくのが分かった。

### ■小学校の校庭で映画の上映を

“慈悲の心の経営”の先代の社長は、タクシー運転手で資金をため、起業した。先代は間違いなく尊敬に値する立派な人だった。そんな人に出会えて、自分は人との出会いの中で生かされているとつくづく思う。

今のシャッター製造の仕事は、とても楽しい。結果がすぐに分かるところが、励みになる。また、責任者としての視点を持つようにもなった。現社長から「人心掌握術に工夫が必要かもしれませんね」と指摘され、自覚することができた。

小林さんの次なる目標は、上映活動をする事。「小学校の校庭にでっかいスクリーンを立てて、映画を上映したいですね。日常の校庭が、白い布で切り取られて非日常になる。そこに頭から突っ込んでいけるような異次元の楽しさを小さな子供に味わってほしい。自分が今でも忘れられない、その不思議な感覚を体験してほしいと思っています」と話してくれた。(「オレンジ世代」取材班)